

学 位 論 文 要 旨

研究題目 Elevated anti-gliadin IgG antibodies are related to
treatment resistance in schizophrenia
(抗グリアジン IgG 抗体価の上昇は統合失調症の治療抵抗性と関連する)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 高次神経制御 系

神経精神医学 (指導教授 松永寿人)

氏 名 本山 美久仁

近年、統合失調症は非均一な集団である可能性が示唆されており、その発症機序に栄養との関連を示す報告がいくつかなされている。欧米では、統合失調症患者でのグルテン感受性の保有率が、健常対照群に比して有意に高いことが報告されているが、その特徴や臨床経過については未だ明らかになっていない。一方、日本では、統合失調症患者におけるグルテン感受性の保有率、グルテン感受性を持つ統合失調症患者の臨床的特徴ともに明らかになっていない。そこで我々は、日本の統合失調症患者のグルテン感受性について調査し、その臨床的背景との関連性を明らかにするために本研究を行った。

対象はDSM-5で統合失調症と診断された20歳-70歳の患者群60名と、年齢と性別をマッチさせた精神疾患のない健常対照群50名とした。対象から採取した血液から血漿を分離し、グルテン感受性関連抗体である抗グリアジンIgG抗体をELISA法で測定した。抗グリアジンIgG抗体が陽性であった者を免疫学的グルテン感受性群、陰性であった者を非免疫学的グルテン感受性群とし、2群間で、発症年齢、入院回数、社会生活機能、QOL、抗精神病薬投与量、統合失調症の症状重症度、治療抵抗性かどうかなどを含めた背景因子を比較した。

結果は、統合失調症患者群と健常対照群で、免疫学的グルテン感受性の保有率に有意差は認められなかったが、免疫学的グルテン感受性群は非免疫学的グルテン感受性群に比べて、抗精神病薬投与量がより多く、治療抵抗性患者の割合がより高かった。抗グリアジンIgG抗体価は、統合失調症患者群では健常対照群に比べて高値であった。また、治療抵抗性統合失調症患者は非治療抵抗性統合失調症患者に比べて抗グリアジンIgG抗体価が高く、抗グリアジンIgG抗体価が高いほど有意に治療抵抗性を呈しやすいことが明らかになった。さらに、抗グリアジンIgG抗体陽性群の中でも、治療抵抗性統合失調症患者の抗体価が、非治療抵抗性統合失調症患者の抗体価よりも有意に高値であった。

これらの結果から、免疫学的グルテン感受性が統合失調症における薬物加療への治療反応性および、治療抵抗性に関連していることが示唆された。